

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03286

研究課題名(和文) 近現代対馬における日韓交流のイメージ：語られる歴史と語られない歴史をめぐって

研究課題名(英文) Image of Japan-Korea exchange in modern Tsushima: the history told and the history not told

研究代表者

村上 和弘 (MURAKAMI, Kazuhiro)

愛媛大学・国際連携推進機構・教授

研究者番号：40363262

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近現代対馬における生活実態の解明を試みた。今日の対馬は「国境の島・日韓交流の島」として知られているが、このようなイメージは国境の消滅・再形成といった近代の大変動を無視したものである。また、実際の対馬は多数の小地域からなる複合体社会であり、「日韓交流」への態度は島内でも地域ごとに差が大きい。本研究ではこのような対馬の多様性・多層性に着目し、「日韓交流」および「朝鮮通信使」をキーワードとした現地調査・資料収集を実施し、近現代における「国境の島・対馬」の総体的把握を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

対馬は「国境の島」として、マスメディアのみならず日韓両国の研究者からも注目を集めてきた。だが、2000年代以降に見られる研究の多くは、韓国との直行航路開設以降の事象に終始してきた。これらに対し、筆者は調査・研究の基盤を対馬の地域社会に置き、そこに生きる人々の営みとの関連で対馬における「日韓交流」現象を読み解こうと試みてきた。その成果として、現代のイベントとしての「通信使行列パレード」に関する研究成果が韓国・朝鮮通信使学会において紹介されるに至った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the actual condition of life in modern Tsushima. Tsushima is now known as the "border island" and/or "Island of Japan-Korea exchange". However, such view ignore modern cataclysms such as the disappearance and re-formation of borders between Japan islands and Korea Peninsula. Moreover, the actual Tsushima is a complex society consisting of many small areas, and the attitude toward "Japan-Korea exchange" varies greatly even within the island.

In this study, we focused on such diversity and multi-layering of Tsushima. Then, we conducted field surveys and data collections with the keywords of "Japan-Korea exchange" and "Chosen Tsushinshi (Korean Embassies)" as a keyword, and tried to grasp the overall picture of "the border island Tsushima" in modern times.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：対馬 日韓交流 朝鮮通信使 国境離島

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、対馬は「日韓交流の島」として知られており、その背景には歴史資源を活用した日韓交流イベントの存在や韓国人観光客の大量来島現象などがあつた。行政も「日韓交流」を用いた観光振興に積極的であり、日韓共同での「朝鮮通信使」のユネスコ世界記憶遺産登録推進事業を進めてきた。このようにして朝鮮通信使 = 日韓交流・善隣友好のイメージがいわば公式イメージとして島内外に発信・受容されていくにつれ、対馬の各地域社会が有していた独自の歴史性、とりわけ近現代における日常次元での交流・接触経験が覆い隠される傾向にあつた。これらの体験は、通信使に象徴される善隣・友好イメージにはそぐわないものが多く、通常、積極的に語られようとはしない。だが一方で、何らかのトラブルが生じた際には、かつての交流・接触経験、とりわけ両親や祖父の世代の経験談が想起される傾向にあつた。

たとえば観光客受入をめぐるトラブルに関し、南部・厳原(いずはら)では、韓国人観光客不要論などのナショナリズム的な言説が表明されがちであつた。これに対し、北部・比田勝(ひたかつ)においては、トラブルは技術的に解決可能な問題であるとされ、よりいっそうの受入促進に重点が置かれてきた。このような対応の違いは南部と北部の歴史性・地域性の違いに基づいて生じたものと考えられる。戦前、対馬北部と朝鮮半島間には定期航路があり、生活次元での往来があつた[村上 2010]。また半島から相当数の子守女性が対馬北部に来ていたという[九学会連合 1954:553]。一方、南部・厳原においては、戦前から博多ひいては日本「本土」との関係が強固であつた。このような日常的な接触(あるいは非接触)体験を通じて島内各地域における「韓国」イメージの原型が形成され、それは戦後、国境の再形成と交通の遮断がなされた後も継承されており、現在の「日韓交流」実践にも影響を及ぼしていると考えられる。

そこで本研究では、島内諸地域における歴史的経験と生活実践に着目し、近現代の状況を踏まえた上で現在の「交流」現象の解明を図ろうとした。

(参考文献)

九学会連合 1954 「対馬総合調査の成果について(座談会)」、『対馬の自然と文化』、古今書院
村上和弘 2010 「対馬における「国境」と「交通」～交通史に基づく交流史記述の試み～」、『人文学論叢』(愛媛大学人文学会)、第 12 号

2. 研究の目的

本研究では「交通と交流」をキーワードに、近現代対馬における生活実態の解明を図つた。対馬は、今日、「国境の島・日韓交流の島」として知られる。その背景には「朝鮮通信使」を利用した行政の地域振興策があるが、このような善隣友好イメージは韓国併合と敗戦に伴う国境の再形成といった大変動を捨象しており、また、実際には多数の小地域からなる複合体社会であるにも関わらず、単層的・均質なものとして描いている。行政レベルにおいても、2004 年の全島合併以前は、対外的には「対馬」という名付け/名乗りを受け容れつつも、自治体ごとに独自の振興戦略をとってきた。本研究はこのような対馬の多様性・多層性に着目し、近現代の島内外での交流実態の解明を通じて、小地域の複合体としての「国境の島・対馬」の総体的把握を試みた。

3. 研究の方法

研究課題の遂行に際しては、現地調査(参与観察・聞き取り等)および文献調査を併用した。主な調査対象項目は地域社会における「交通と交流」の変遷であり、その重要なサブトピックとして「日韓交流」を取り扱った。3 年間の事業年度を通じ、いわば「定点観察」の対象として「対馬厳原港まつり」の参与観察・関係者インタビューを行った。また、2017 年 10 月末に「朝鮮通信使に関する記録」がユネスコ「世界の記憶」に登録されたことを受け、登録を推進してきた日本側事業主体である「朝鮮通信使縁地連絡協議会」の動向調査も継続して実施した。その他、対馬北部を中心として戦前期の交通・交流実態の聞き取り調査を随時実施した。

最終年度(2019 年度)は基本的に補充調査を行うにとどめ、研究成果のとりまとめを行う予定であつたが、同年夏から「NO JAPAN」運動に伴う韓国人観光客の急減が顕著になりだしたため、同年 9 月に島内における現況調査を実施した。

4. 研究成果

対馬は「国境の島」として、マスメディアのみならず日韓両国の研究者からも注目を集めてきた。だが、2000 年代以降に見られる研究の多くは、韓国との直行航路開設以降の事象に終始してきた。これらに対し、筆者は調査・研究の基盤を対馬島内の地域社会に置き、そこに生きる人々の営みとの関連で対馬における「日韓交流」現象を読み解こうと試みてきた。本研究課題においては、「交通と交流」という観点から、島内の地域間関係にも留意しつつ、地域社会の複合体として「対馬」を記述しようと試みてきた。このような生活史・交通史的な観点を有する対馬研究は、管見の限り、宮本常一以降、ほぼ皆無に等しかったと言っても良いだろう。

また、2000年代以降、韓国における朝鮮通信使研究の高まりを受け、対馬に対する研究関心も高まりつつあるが、多くは室町期・江戸期の「通信使」研究であり、さもなければ領土帰属に関する研究成果が目立つ。一方、先述の通り地域社会の歴史的経験や地域住民の生活実感に調査・研究の基盤をおいてきた筆者の研究成果、とくにイベントとしての「通信使行列パレード」に関する研究成果は、ユニークな存在として韓国の朝鮮通信使研究者に紹介されるに至った。

今後の展望としては埋もれがちな生活史的事象の掘り起こしを継続し資料の充実に努めるとともに、喫緊の課題として、2019年夏から影響が顕在化してきた「NO JAPAN」運動に伴う韓国人観光客の急減現象、そして追い打ちをかけるように広がった新型コロナウイルスの流行が地域社会にもたらしたインパクトについて調査を進めたいと考えている。

対馬は近代以降、国境の消滅と再形成、あるいは経済情勢の変化等に伴い、位置づけが大きく揺れ動いてきた地域である。本研究および今後の研究継続によってもたらされるであろうデータは、変動する国際情勢のもと、現実に国境に直面するなかで人々が選択してきた交流戦略の解明を図るものであり、近現代対馬における「日韓交流」の研究自体が乏しい中、国境における地域社会の維持に関しても貴重なデータと知見をもたらすものであろうと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 村上和弘	4. 巻 25
2. 論文標題 対馬・厳原の「通信使行列」パレード；その誕生と変容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 朝鮮通信使研究	6. 最初と最後の頁 43-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 村上和弘
2. 発表標題 国境離島と世界、国家、そして<人々>
3. 学会等名 日本島嶼学会2019年度宮古島大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村上和弘
2. 発表標題 対馬・厳原の通信使行列 - その誕生と変容 -
3. 学会等名 朝鮮通信使学会春季国際学術シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村上和弘
2. 発表標題 交通から見た近現代の対馬生活史 ~ 海上交通の時代を中心に ~
3. 学会等名 対馬学フォーラム2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村上和弘
2. 発表標題 対馬はいかにして<日韓交流の島>になったのか
3. 学会等名 日本島嶼学会2017年次甑島大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村上和弘
2. 発表標題 日本における<国境の島・対馬>イメージの変遷
3. 学会等名 第5回東アジア島嶼海洋文化フォーラム2017(5th EAI0F) (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 橋弘文・手塚恵子編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 せりか書房	5. 総ページ数 297
3. 書名 文化を映す鏡を磨く	

1. 著者名 全南大学校日本文化研究センター編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 民俗苑(韓国)	5. 総ページ数 419
3. 書名 日本文化の現場と現在(原文韓国語)	

1. 著者名 上水流久彦、村上和弘、西村一之編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 474
3. 書名 境域の人類学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----